

障がいのある人との共同創造を用いた地域での「学び合いの場」づくりと定着への関与 ーリカバリーカレッジの取り組みを参考にした I 県における試みー

社会福祉学専攻 滝口 康子

要 旨

現行の障害福祉サービス事業所は、障害者総合支援法に基づき市区町村から支給決定を受けた者のみが利用可能であり、制度の枠組みから外れた人々は支援につなぐにくい現状がある。地域には複雑で重層的な生活課題を抱える人々が存在する中で既存の福祉サービスに当てはめるだけでなく、一人ひとりが主体的に役割を発揮できる多様な場の必要性が指摘されている。

本研究は、リカバリーカレッジの理念を参考に地域における「学び合いの場」の実践を通して、その意義と可能性を明らかにすることを目的とした。具体的には、障がいある当事者、家族、専門職、地域住民が対等な立場で協働する場を設定しリカバリー志向への意識がどのように変化するのかを明らかにすること、また協働しての場づくりを通して支援の輪がどのように広がるのかを考察し、リカバリーカレッジの理念を参考に協働者（障がいある人とピアサポーター、住民、専門職等）同士が意見を出し合えるセミナーやワークショップを開催し協働の営みから地域に「学び合いの場」が定着できるのかを検証した。

研究方法としては、アクションリサーチを採用し M 市において当事者、家族、専門職、地域住民が対等な立場で参加する「学び合いの場」を複数回開催した。研究者自身が協働者と共に企画・運営・ふり返りに関与し自身の省察を重ねながら実践に取り組み、データはアンケートの自由記述、インタビュー記録、フィールドノート等を用い、質的に分析した。

分析の結果、「学び合いの場」は心理的安全性を基盤とすることで、協働者が安心して語り合い、障がい理解を「知識として学ぶ」ものから「我が事として捉える」ものへと変容させる可能性を有していることが示された。協働者からは、「今後も継続して学びたい」という意欲や、日常生活の中で普及啓発に関わりたいという意識の芽生えが確認された。

一方で、地域におけるリカバリーカレッジの認知については「まずは知ってもらうこと」が課題として浮かび上がった。その点において、ワークショップ等の参加型体験イベントは、専門的知識を前提とせず、共同創造を通じて相互理解を促す点で、地域住民にとって有効な入り口となり得ることが示唆された。また、「学び合いの場」は障がい理解にとどまらず、高齢者、子ども、家族など、地域が抱える複合的課題に対応する場として展開できる可能性も見いだされた。新たな場を一から創出するのではなく、既存の地域活動やネットワークと協働することが地域性を活かしつつ持続可能性を高める上で重要であることは示せたものの、その成果を構造的に整理するには至らず、今後の課題として残された。

また、本研究は M 市という特定地域での実践であったことから今後は、全国各地で多様な形態で運営されているリカバリーカレッジの実績を踏まえ、I 県においてどのような制度や地域資源と接続していくのかを検討していく必要がある。

以上より、リカバリーの旅路においては、福祉サービス等の制度的支援だけでは限界があり、リカバリーに必要なのは単なるサービス提供だけではなく、意味や価値を共に創り出す関係性や場であることが示された。「学び合いの場」は、リカバリーを障がいや病気に限

定せず、人生全体に関わる概念として捉え直しており、協働者が自身の変化を自覚していない場合であっても、場への継続参加が他者の回復をも支える力をもつことが明らかとなった。

リカバリーカレッジを参考にした「学び合いの場」は、地域と精神保健福祉サービスをつなぐ懸け橋として、多様な人々を結び、理解と実践を循環させていく学びの基盤としての意義を有している。今後は、その理念を地域に根づかせながら、持続的かつ柔軟な形で発展させていくことが求められる。

Key Words

アクションリサーチ, リカバリーカレッジガイダンス, 共同創造, ボトムアップ